



Title	ヒンディー語小説『パーロー』に描かれる女性像 : ヒンドゥー聖典との比較から
Author(s)	虫賀, 幹華
Citation	印度民俗研究. 2023, 21, p. 3-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91740
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヒンディー語小説『パーロー』に描かれる
女性像

ーヒンドゥー聖典との比較からー

虫賀 幹華

はじめに

筆者がヒンディー語小説『パーロー (*Pāro*)』と出会ったのは、2022 年 8 月に大東文化大学の石田英明先生を講師にむかえて行われた「ヒンディー文学研究会」においてであった。サンスクリット語のヒンドゥー教の聖典や、その伝統を引き継いだ現代のヒンディー語の手引書類の文章に親しんでいる筆者は、ヒンドゥー教徒の女性が抱える苦悩を切々と描いたその小説の内容に驚くとともに、聖典類の視点からでは捉えられないインドの一面を知った。5 年間の北インドでの留学中、女性の苦悩を目の当たりにしたことは何度もあったが、『パーロー』ほど明確に女性の置かれた状況と本音に触れることはできなかった。ヒンドゥーの聖典と現地での観察にヒンディー語小説から得られる知見を加えることによって、インドの宗教文化にさらに深く迫ることができるのではないかと感じたことが、本稿執筆の動機である。

『パーロー』が筆者にとって興味深かったのは、ヒンドゥー教の祭事が多く登場するからでもある。描かれた順に挙げると、

- アナントの第 14 日目 (*Anant caturdaśī*, バードラパダ月白分 14 日目)
- 祖霊の半月 (*Pitṛpakṣa*, アーシュヴィナ月黒分 1~15 日目)
- 壺の設置 (*kalaś-sthāpnā*) とその後の行列 (*yātrā*) に言及される九夜祭 (*Navrātri*, アーシュヴィナ月白分 1~9 日目)
- 勝利の第 10 日目 (*Vijay daśamī/ Daśaharā*, アーシュヴィナ月白分 10 日目)
- 秋の満月 (*Śarad-pūrṇimā/ Kojāgar*, アーシュヴィナ月白分 15 日目)
- 灯明祭 (*Dīpāvalī/ Dīvālī*, カールティカ月黒分 15 日目)
- バンヤン樹とサーヴィトリーのヴラタ (*Vaṭ sāvitrī vrat*, ジェーシュタ月黒分 15 日目)
- マドゥシュラーヴァニー (*Madhuśrāvaṇī*, シュラーヴァナ月黒分 5 日目~白分 3 日目)

である¹。これらのうち最後の 2 つは、既婚女性によって行われるヴラタ

¹ ヒンドゥーの暦と各祭事の内容については、拙論「北インド・ヒンドゥー祭

(特定の願望を達成するために食事の節制や儀礼をする「願掛け」)である。多くが、読者に対して時期を説明し季節感を与えるための言及で、祭事の様子が事細かに描写されることはほとんどない。「～の頃には」といった時節を示すのに、グレゴリオ暦の月日ではなく、祭事名が使用されるのは現在のインドでもよくあることだが、その内容を知らない読者が行間に込められた季節感や背景にある価値観をきちんと理解することは難しい。そこで本稿は、小説のなかでも扱われており、筆者が北インドの聖地ガヤーで観察した「バンヤン樹とサーヴィトリのヴラタ」に注目し、ヴラタで読まれる縁起譚 (*kathā*) も紹介しながらヒンドゥーの聖典類における理想の女性像を概観した上で、それと比較しながら小説『パーロー』に描かれた女性の立場を考察する。

バンヤン樹とサーヴィトリのヴラタと縁起譚

筆者がビハール州南部のガヤーで見ることでできたバンヤン樹とサーヴィトリのヴラタは、ジェーシュタ月 (5～6 月) の新月の日に²、夫が存

事暦 (1)～(4)』(『ラク便り』83～85 号、87 号、2019～2020 年) を参照されたい。筆者が観察したのはビハール州南部とウッタル・プラデーシュ州東部の地方都市の祭事で、ミティラー地方の村のものではないが、アナントの第 14 日目とマドゥシュラーヴァニー以外については祭事の概要を掴むことができるはずである。

² バンヤン樹とサーヴィトリのヴラタについて、イラーハーバードとヴァーラーナシーで出版された祭事の手引書はジェーシュタ月の新月に行われる祭事であるとしている。ハリドワールで出版された手引書はジェーシュタ月の黒分 13 日目とタイトルには掲げながら、白分あるいは黒分の 13 日目から満月あるいは新月までとする (Bahan n.d.: 53)。ウェブサイト [drikPanchang](https://www.drikpanchang.com/festivals/savitri/vat-savitri-date-time.html) によると、晦日終わりの暦を採用している地域ではジェーシュタ月の満月に行われるので、マハーラーシュトラ、グジャラート、南インドでは、満月終わりの暦を採用する地域の 15 日後にこの祭事が行われるとのことである (<https://www.drikpanchang.com/festivals/savitri/vat-savitri-date-time.html> 最終閲覧日: 2022 年 12 月 26 日)。バンヤン樹とサーヴィトリのヴラタについて記す『バヴィシュヤ・プラーナ』では、ヴラタを行う日としてバードラパダ月の白分 13 日目から満月までの 3 日間 (4.102.66) とジェーシュタ月の満月 (4.102.86) の両方が記載される。『スカンダ・プラーナ』ではジェーシュタ月の白分 13 日目から満月までの 3 日間 (7.1.166.77-78) がヴラタの執行日であ

命である既婚女性によって行われるものであった。彼女らは朝、何も食べずに、水浴びをしてバンヤン樹のある小さな広場に出かけた。バンヤン樹に対して儀礼をして、赤い色を巻き付けながら右繞し、ヴラタの縁起譚であるサーヴィトリの物語をバラモンに読んでもらって帰宅した。これは女性の「スハーグ (*suhāg*)」を不動のものにするために行われるヴラタである (Singh n.d.: 43)。スハーグはサンスクリット語の *su* (良い) と *bhaga* (幸運) のバフブリーヒ複合語 *subhaga* (良き幸運を持つ) の派生語 *saubhāgya* (幸福、幸運) に由来する。詳細に検証する必要はあるが、サンスクリット語文献でも *saubhāgya* は「女性にとっての幸福」の意味で用いられることが多いように思われる。ヒンディー語になると女性と確実に結びつき、『ヒンディー語＝日本語辞典』では「結婚した女性にとって夫が存命である幸福」であると説明され、「スハーグである者」を表すスハーギン (*suhāgin*) は女性名詞として登録されている (古賀・高橋 2006: 1370)。1年間のヴラタをまとめるギーター・プレス社の手引書『ヴラタの紹介 (*Vrat-paricay*)』では、ヴラタの儀軌の中で、最初に「寡婦の状態など私の全ての罪障を取り除くために、ブラフマーとサーヴィトリを喜ばせるために、サティヤヴァット (サーヴィトリの夫) とサーヴィトリを喜ばせるために、バンヤン樹とサーヴィトリのヴラタを私は行おう」³と宣言することや、サーヴィトリの像にアルグヤ水を捧げる時に「寡婦でないことを備える女性の幸福をお前は与えよ、私の、良くヴラタを実践する者よ。息子たちを、孫たちを、幸福を [与えよ]。アルグヤ水を受け取れ。お前に敬礼」⁴と唱えること、バンヤン樹に対して「枝々が成長してお前が大地で繁るように、私が常に、息子たちや孫たちに満たされるように」⁵と唱えて礼

るとされる。ゴーラクプルに本社があるギーター・プレス社の祭事の手引書は、「このヴラタは『スカンダ・ブラーナ』と『バヴィシュヤ・ブラーナ』によるとジェーシュタ月の満月に、『ニルナヤームリタ』などによると新月に行われる。この地域ではたいてい新月に行われる」 (Śarmā 2012: 91) と説明する。

³ *mama vaidhavyādisakaladoṣaparihārārthaṁ brahmasāvitṛprītyarthaṁ satyavatsāvitṛprītyarthaṁ ca vaṭasāvitṛvrataṁ ahaṁ kariṣye /*

⁴ *avaidhavyaṁ ca saubhāgyaṁ dehi tvaṁ mama suvrate / putrān pautrāṁś ca grhāṇārghyaṁ namo 'stu te //*

⁵ *yathā śākhāpraśākhābhīr vṛddho 'si tvaṁ mahītale / tathā putraś ca pautraś ca*

拝することが書かれる (Śarmā 2012: 91–92)。主にヴラタに関する現代の冊子を対象にしてスハーグの内容を詳細に検討した R・A・メンジースは、婚姻上の至福の状態がスハーグであるのだが、それは夫婦間だけの問題ではないと説明する (Menzies 2014: 53)。夫が存命であることと息子がいることはスハーギンであることの最低条件で (ibid: 73, 81)、家族全体に対して経済的な繁栄をもたらしたり、家族の成員たちと良い人間関係を築くこと (ibid: 108) も求められるとする。

このヴラタの縁起譚の主人公であるサーヴィトリは、こうした幸福で吉兆なスハーギンとしての女性を体現する。出版地の異なる、1 年間のヴラタを説明するヒンディー語の手引書は、筆者の所有する 4 冊ともバンヤン樹とサーヴィトリのヴラタとこの縁起譚を記載している (Bahan n.d.: 53–57; Miśra n.d.: 25–28; Śarmā 2012: 91–92; Singh n.d.: 43–46)。バンヤン樹とサーヴィトリのヴラタについてまとめた記述を含むプラーナは『バヴィシュヤ・プラーナ』と『スカンダ・プラーナ』であり、やはりサーヴィトリの物語を含んでいる⁶。サーヴィトリの物語の原型は『マハーバーラタ』第 3 巻 277–283 章にあり⁷、以下に示す梗概は『マハーバ

sampannam kuru mām sadā //

⁶ 『バヴィシュヤ・プラーナ』と『スカンダ・プラーナ』のほか、ヴラタとは関係しない形で他の多くのプラーナにもサーヴィトリの物語が確認できる。A・パルポーラは、『マハーバーラタ』のものを中心に据えて内容をまとめつつ、それらの相違を丁寧に記録している (Parpola 1998: 172–183)。

⁷ 『マハーバーラタ』では、サーヴィトリはサティヤヴァットの命日の 4 日前からヴラタを始めたが、それが暦上のいつであったのかは書かれない。他方で『バヴィシュヤ・プラーナ』と『スカンダ・プラーナ』では、サーヴィトリが 3 日間のヴラタを開始したのはそれぞれプローシュタパダ月 (バードラパダ月) (4.102.37–38) かジェーシュタ月の白分 12 日目の夕方 (7.1.166.45) であるとされる。サーヴィトリが実施したヴラタが、この章で勧められているバンヤン樹とサーヴィトリのヴラタであるということになる。そして『マハーバーラタ』のサーヴィトリの物語にはバンヤン樹は登場しない。『バヴィシュヤ・プラーナ』のヴラタの儀軌でも、先に書かれるバードラパダ月白分 13 日目から行われるヴラタでは、バンヤン樹への礼拝は指示されない。しかしその後、「同様にジェーシュタ月の 15 日目に、バンヤン樹のところで、素晴らしく高潔な女性は、この方法で 3 晩の断食をして、サティヤヴァットとともに貞淑な女性を果物と供物、灯明によって礼拝をすべきである」(4.102.86–87)

ーラタ』のものである⁸。妻ドラウパディーを連れ去られたユディシュティラは、悲嘆に暮れ、彼女のように貞淑な女性がいたかどうかをマールカンデーヤ仙に尋ねた。賢者はそこで、サーヴィトリの話を語るのである。

マドラの王アシュヴァパティには子供がいなかった。18 年間苦行すると、満足したサーヴィトリ女神が現れ、願望を選ぶように王に言った。王は息子を望むが、女神は娘が生まれるだろうと予告した。やがて娘が生まれ、王はサーヴィトリと名付けた。美しい娘に育ったが求婚者がいなかった。「ふさわしい時に娘を嫁にやらぬ父は非難される」という『マヌ法典』9.4 からの引用を含めながら自身に適した夫を探すように王に言われ、サーヴィトリは夫探しの旅に出る。全ての聖地でバラモンに布施をしながらあちこちを訪れた。

ある日アシュヴァパティ王は、ナーラダ仙と話をしていた。そこへサーヴィトリが帰ってくる。促された彼女は、シャールヴァ国の王族の、デュマツセーナの息子サティヤヴァットを夫として選んだことを伝えた。デュマツセーナは視力を失い、王国を奪われ森で生活していた。サティヤヴァットは森で育ったという。するとナーラダは、サティヤヴァットの徳性を述べるものの、彼は余命一年であることを伝えた。アシュヴァパティはサーヴィトリに、別の者を探すように言うが、サーヴィトリは次のように拒否した。「財産の分け前は一度訪れ、娘は一度与えられ、人は一度だけ「私は与える」と言う。これらの三はただ一度だけである（『マヌ法典』9.47）。長寿であろうと短命であろうと、長所があろうとなかろうと、私は一度だけ夫を選びます。二度は選びません。」これを聞いたナーラダは王を説得し、結婚を認めさせた。

と別の時期に行われる同じヴラタが簡潔に述べられる。もともとこのヴラタとは関連していなかったバンヤン樹を取り入れるための付け足しであるように見受けられる。さらに『スカンダ・プラーナ』では、頭痛を訴えたサティヤヴァットが休んだのはバンヤン樹の木の下であったとされ、縁起譚の方までバンヤン樹が登場する（7.1.166.50）。ヴラタの儀軌には、バンヤン樹の下で14組の夫婦を饗応することが指示される（7.1.166.96）。

⁸ 引用には上村勝彦の訳を使用した。

王は、婚礼に必要なものを準備して、娘とともに盲目のデュマツトセーナのところに行き二人の結婚を申し出た。デュマツトセーナは最終的に受け入れ、結婚式が執り行われた。結婚後、彼女は森で暮らし、舅と姑、夫に奉仕して家族を満足させた。時が経ち、サティヤヴァットの死ぬべき時期がやってきた。4 日後に夫が死ぬというときに、彼女は 3 日間続くヴラタを開始した。サティヤヴァットの命日とされた日になり、舅と姑はヴラタを解いて食事をするように言った。その時サティヤヴァットは、木の実と薪を集めに森に出かけようとした。サーヴィトリは無理を言って彼に付き添った。サティヤヴァットは、激しい労働が原因で頭痛を訴え、サーヴィトリの膝で休んだ。

彼女がナラダ仙の言葉を思い出し案じているうちに、ヤマが現れ、サティヤヴァットの寿命は尽きたとして彼の体から魂を引き抜いて連れて行った。そこでサーヴィトリは、ヤマの後をついて行く。引き返すように言うヤマに対してサーヴィトリは次のように言った。「私の夫が連れていかれる所、あるいは自ら行く所、私もそこへ行きます。これは永遠のダルマです。苦行、師匠への奉仕、夫への愛情、誓戒にかけて、そしてあなた様の恩寵によって、私の行く道は妨げられることはありません。」そして、法が重要であり法に従う以外に道はないことなどを続けて述べた。ヤマは彼女の言葉に満足し、夫の命以外の願い事を選び、引き返すように言った。彼女は舅の視力が回復することを願った。そして、彼女がさらに知的な話を続け、それにヤマが満足し、夫の命以外の願い事をするように言った。サーヴィトリは、舅が王国を取り戻すこと、自身の父が 100 人の息子を授かること、自身とサティヤヴァットの間にも 100 人の息子が生まれることを順に願った。

最後にヤマは、サーヴィトリの言葉に感心して、制限なしで願い事を選ぶように言った。サーヴィトリは、夫が生き返るようにと望み、次のように続けた。「私は夫なしでは死んだも同然ですから。夫なしでは私は幸福を望みません。夫なしでは天界を望みません。夫なしでは富貴を望みません。夫がいなければ、生きていたいとは思いません。あなた御自身、私に 100 人の息子を授けるという願いを叶え、しかも私の夫を奪うとは・・

このサティヤヴァットが生き返るようという願いを選びます。あなた御自身の言葉が真実になるでしょう。」ヤマはサティヤヴァットを解放し、夫婦で400年生きることなどを宣言した。

サーヴィトリが夫の屍があったところに戻ると、彼は意識を取り戻した。両親を心配させたくないと言うサティヤヴァットと共に急いで両親のいる隠棲所を目指す。その頃、視力の回復したデュマツセーナとその妻はあちこちを探し回っていたが、聖仙たちがサティヤヴァットは生きていると言って慰めた。そこへ、サーヴィトリとサティヤヴァットが帰ってくる。サーヴィトリはヤマとの間で起こった全てのことを皆に話した。そして、ヤマに願ったように、デュマツセーナは王国を回復し、アシュヴァパティもサーヴィトリもそれぞれ100人の息子に恵まれた。「このようにしてサーヴィトリは、自身の父母と、姑と舅と、夫の一族を、全て苦境から救い出したのである。」

この物語で際立つのは、ヤマを感心させたサーヴィトリの知性である。彼女の夫への献身は強調されるが、自ら結婚相手を決め、父や聖仙を説得し、夫の命日とされた日の数日前から自主的にヴラタを始め、森に行く夫に付き添うことを自分で決め、恐ろしい冥界への道をヤマを追って臆せず進んでいくといった、彼女の自立性と強さが印象的である。

小説『パーロー (Pāro)』

小説『パーロー』は、1946年にマイティリー語で発表されたナーガールジュン(1911-1998)の小説における処女作である(Misra 1985: 7)⁹。彼自

⁹ ナーガールジュンは、ビハール州北部のミティラー地方のバラモン家系の出身で、本名はヴァイディヤナート・ミシュラである。地元で教育を受けたのち、ヴァーラーナシーおよびコルカタでサンスクリットを学び修士号を獲得した。1930年にマイティリー語で詩を発表し、35年からはヒンディー語の詩作も精力的に行った。彼は詩人として著名だが、小説も計13作品あり、3作品がマイティリー語、その他はヒンディー語である。1936年にはスリランカに渡り得度し、法名ナーガールジュンを得た。38年にはチベットを旅行し、帰国してからは独立運動や農民運動に励み投獄された経験ももつ(ナーガールジュン 1981: 124)。彼の生い立ちや活動は、作品に大いに影響を与えている。

身も翻訳に関わったヒンディー語訳は 1975 年に出版されており、本稿ではヒンディー語版を使用する¹⁰。バラモン社会と女性を主題にした作品で¹¹、舞台はビハール州北部のミティラー地方の村である。ブラジカーント・ジャー（通称ビルジュー）という名のバラモン青年が、従妹のパーロー（本名はパールヴァティー）との思い出を回想するという形式で話が進む。パーローは、ビルジューの父の妹の娘で、歳はパーローの方が4つ下である。物語の中心はパーローの人生だが、寡婦であるパーローの母の置かれた境遇や感情も娘の人生に大きく関わっている。

長く子供に恵まれなかったパーローの両親（ビルジュー目線の作中では叔父夫婦）が、神に願い、誕生したのが娘パーローである。父はパーローにも熱心に教育を受けさせようとしたが、母はそれをあまり良く思っていない。他方でビルジューは、8 年生を合格したのち、より良い教育を受けるために都会に住む母方の伯父（母の兄）のもとで暮らすことになる。

パーローが 13 歳の時の夏、彼女の父が亡くなった。葬儀は男性が取り仕切るべきとされているため、甥であるビルジューがパーローに代わって葬儀の喪主を務めた。夫を亡くした悲しみとこれからの人生に対する不安をパーローの母は娘を罵倒して八つ当たりする。パーローは結婚の適齢期を迎えていたが、「兄弟姉妹の間でこそ結婚があればどんなにか良いのに。適当なところから見知らぬ男を連れてくるなんて賢明な方法といえる

ナーガールジュンの人生と小説作品を概観した P・C・バットによれば、小説には彼自身の思想が記されており、苦悩する下層階級の擁護と上層階級による不正行為の矯正の呼びかけや、彼の政治観、特に会議派政治家への反対、女性の幸福への願い、国家と地域への愛着、社会改革志向がみられる (Bhatt 1974: 247-254)。なお、マイティリー語の小説は「ヤートリー (Yātrī)」というペンネームで発表している。

¹⁰ 本稿の執筆にあたり、1975 年出版の単行本 (A) と 1994 年出版の著作集収録 (B) の 2 つのヒンディー語版『パーロー』を参照した。A と B は異なる箇所も少なくない。概して B は、A の本文にはなかった解説を本文に入れ込んでいる。なお、2003 年出版の著作集 *Nāgārjun Racnāvalī* 第 4 巻に収録されるものは B と同じであるように見受けられたため逐一確認はしなかった。

¹¹ バットとヤーダヴによれば、女性に関連する問題意識を持って書かれたナーガールジュンの小説には他に、*Ratināth kī Cācī*, *Naī Paudhe*, *Kumbhīpāk*, *Ugratārā* がある (Bhatt 1974: 245) (Yādav 2001: 37)。

の？」(A: 18, B: 543) とビルジューに対する恋心を隠しもせず、自身の結婚を悲観している。

その後ビルジューは、母方の伯父の住む都市に移り学問に励む。パーローは、チュルハーイー・チョウドリーという名の 45 歳の男性との縁談がまとまり、秋には結婚式を挙げた。チョウドリーにとっては 2 度目の結婚であった。この縁談をまとめたのは仲介役を務めた親戚の男性で、彼は花婿側の家から金と衣類、食べ物を受け取っていた。

ビルジューが自分の村に帰り、パーローの家を訪れたのは翌年の夏休みで、ちょうどパーローの父の一周忌の時だった。結婚式のあと、夏前のヴァイシャーカ月にパーローを嫁ぎ先に移らせることをチョウドリー側は望んだが¹²、叔母は断っていた。「彼女がヴァタサーヴィトリー (バンヤン樹とサーヴィトリーのヴラタ)¹³をするのを見ずに、マドゥシュラーヴァニーをするのを見ずに、どうやって娘の送別 (*vidāi*) (註 12 参照) をすることができる？」(A: 43, B: 555) と。パーローはビルジューに、夫は「人間の姿をした餓鬼 (*narpiśāc*)」であるとしてその酷い振る舞いについて語り、女性には二度と生まれたくないと嘆く。

夏の後、雨季に行われるマドゥシュラーヴァニーの前日にビルジューはパーローの家を再訪し、来ていたチョウドリーと二人で会話をする機会を

¹² 結婚式 (*vivāh*) の後、新婦はすぐに婚家には移らず、「送別 (*vidāi*)」と呼ばれる門出の儀式までは実家で暮らすのが伝統的な様式である。特に新婦が幼い場合には、結婚式から送別まで何年か間を置くこともある。最近では新婦の年齢も上がってきており、筆者の友人で、26 歳で結婚したバラモン女性 (ウッタル・プラデーシュ州東部出身) は、結婚式の後すぐに送別の儀礼を行い、翌日には婚家に移ったとのことである。ミティラー地方出身のカーヤスタの男性に聞いたところ、ここ 30 年ほどで、『パーロー』でも言及される結婚から 4 日目の儀礼 (*caturthī*) の後、16 日目までの間にいつでも送別の儀礼を行って良いという慣行になったそうである。そして最近では、4 日目の儀礼の重要性も低下し、結婚式の翌日に 4 日目の儀礼を行い、その夜に婚家に移ったり、さらには結婚式の祭壇の下で送別の儀礼まで行ってしまい、婚家で 4 日目の儀礼をする場合もあるとのことである。

¹³ A では *baḍisāti* となっており、註で「結婚初年度にジェート月 (= ジェーシュタ月) の特別な日に祝われる祭事」と説明されている (p. 43)。B では *vaṭ sāvitrī* (p. 555) である。

得た。ビルジューはチョウドリーから良い印象を受け、パーローに「彼は神のような人である」と話したが、パーローは「どうぞ、あなたも信じれば、彼が神であると。私にとって彼は・・獣 (*paśu*) よ」(A: 71, B: 569) と答えるのだった。

ビルジューは家に帰る前日の夜、チョウドリーがパーローに暴力を振っている現場を目撃する。ビルジューは咄嗟に駆け寄り、「泣くな。2 回目の結婚はあり得ないんだから。どうにかして彼と過ごさなくてはならない。僕は二人がうまく行くように神に願う。それ以外に方法はないんだよ」(A: 79, B: 573) と言う。

その後、パーローが嫁ぎ先へと移る時にビルジューは村に帰ることができなかった。パーローがよこした手紙には、自分の境遇を受け入れることにしたことと、自分のことを忘れるように、休みにはパーローの母に会いに行くようにという願いが書かれていた。そのうち、パーローが妊娠したことを知ったビルジューは、妊娠 3,4 ヶ月の頃に、パーローの母に頼まれてチョウドリーの家をはるばる訪問した。パーローは生まれてくる子どもについて、「この腹にいるのは誰なの。鬼 (*rākṣas*) なの女鬼 (*rākṣasī*) なの？」(A: 91, B: 579) と言って、その誕生を呪う。ビルジューは、パーローの嫁ぎ先を後にする時、彼女に対して安産祈願をした。するとパーローは、「そうじゃない、次の人生ではこんな地獄を味わわなくて済むように祈ってよ。その時にはあなたと私は兄弟姉妹じゃなくて・・(ビルジューが口を塞ぐ)」(A: 91-92, B: 580) と心のうちを吐露する。そして、これがパーローと会った最後になった。ビルジューが妹の結婚式のために村に戻ったとき、パーローが男の子を産み、亡くなったという知らせが入った。パーローの実家に行き、ビルジューはパーローの葬儀の喪主を務めた。パーローの息子は彼女の母が引き取り、チョウドリーが再婚したという話題で物語は締めくくられている。

ヒンドゥー的理想の女性像との対比で『パーロー』を読む
サーヴィトリの物語でも引用される『マヌ法典』は、ヒンドゥー教の法典（ダルマシャーストラ）が理想とする女性の姿を端的に見せてくれる。

特に 5 章の最後に女性の生き方が、9 章の最初には夫婦の生き方がまとめられている。サーヴィトリはその言動から明白であるように、一人の夫に永遠に付き従うことを自身の務めとしている。『マヌ法典』には、「死ぬまで、辛抱強く、自己抑制をし、貞節を守り、一人を夫とする妻にとっての最高の生き方（ダルマ）を求めるべし」（5.158）という規定がある¹⁴。

『マヌ法典』を基底としてヒンドゥー法典の世界観についてまとめた渡瀬信之は、家庭における妻・母の重要性と、彼女らへの礼賛と敬意が見られることについて記載した後、「しかしながらそのような妻の地位は、夫に従属して、夫に忠実と貞節を尽くす妻である限りにおいて約束されるものであった」（渡瀬 1990: 97）と指摘する。サーヴィトリが自身の知性を活かして夫を守り、家族の繁栄をもたらすことができたのは、サーヴィトリが「夫に忠実と貞節を尽くす妻」すなわちパティヴラターであったからに他ならない。学問に秀でたパーローが、彼女の才能を伸ばしたいと願う父を失ったあと、歳の離れすぎた男性のもとに嫁がされ苦しみ、最後には亡くなってしまうという悲劇の物語とあまりに対照的である。

『マヌ法典』には、「夫は、性悪で、勝手気ままに振舞い、良い資質に欠けていても、貞節な妻によって常に神のように仕えられるべし」（5.154）という規定も確認できる。サティヤヴァットの余命が 1 年であるため別の夫を探すように言った父アシュヴァパティに対し、サーヴィトリは「長寿であろうと短命であろうと、長所であろうとなかろうと、私は一度だけ夫を選びます。二度は選びません」と断言した。同様に『パーロー』でも、「足が不自由であろうと盲目であろうと、手や目に欠陥であろうと、ハンセン病であろうと気狂いであろうと、年老いていようと中年であろうと、目の前にいる夫が最高神なのだ」とチョウドリーの年齢を知った時のビルジューの考えが記されている。しかし後者では「45 歳の男性と結婚させるなんて叔父が生きていたら許しただろうか」と問いかけており、ビルジューはこれをネガティブに捉えている（A: 41, B: 554）。女性には離婚や再婚の機会がないことも、彼女が暴力を振るわれていたのを目撃したビルジュー

¹⁴ 引用には渡瀬信之の訳を使用した。

一が、やむを得ず受け入れなければならない現実としてパーローを論じた言葉から伺える。両者ともが、『マヌ法典』の規定と共通する、どのような夫であろうと彼に永遠に尽くすべきであることを書いている。しかし、一方では賞賛されるべき貞淑な女性の意志の強さが描かれているのに対し、他方では同情を誘うような女性の無力さが伝えられている。

『マヌ法典』や『マハーバーラタ』は古代の文献だが、描かれる理想の女性像やサーヴィトリーの物語は、ヴラタの実践を通して女性たちに知られる。彼女らは縁起譚の中のサーヴィトリーの行いと自身が行うヴラタとを関係づけ、貞節な妻として自己認識をする。また現在でも、ヒンドゥー教の聖典類の現代語訳は安価で売られており、その記述や価値観をヒンドゥー教における正統の信仰であるとして、サンスクリット語を解さなかったり分厚い聖典自体を読まないような民衆にまで広めようとする書籍や冊子も数多く出版されている。ギター・プレス社の『女性の義務についての指南 (*Striyōke liye Kartavyaśikṣā*)』は、題名の通り、女性のあるべき姿やなすべきことについて、『バガヴァッド・ギター』を含む『マハーバーラタ』、『ラーマヤナ』、『マヌ法典』、カウティリヤの『チャーナキヤニティ』、複数のプラーナ文献といったヒンドゥー教の聖典類からサンスクリット語の原文を引いて説得力を与えつつ、ヒンディー語でまとめている書籍である¹⁵。後半は模範となるべき女性の物語が多く紹介され、サーヴィトリーの物語も詳しく記述される。物語を記載した後に著者は、「この伝説 (*itihāsa*) からスハーギンである母や姉妹たちは、夫と姑・舅には特に奉仕すべしということを学ぶべきである」と述べる (Goyandkā 2014: 94)。

こうした聖典類と、文学の記述との相違と関連させて考えたいのが、マドゥシュラーヴァニーの機会にパーローの実家を訪れたビルジューが、S・C・チャタルジー (1876–1938) の『チャリトラヒーン』¹⁶を手に入っていた

¹⁵ 『女性の義務についての指南』は手元にある 2014 年版で 71 刷、総印刷部数は 133 万 3 千、総頁数は 157 頁で 15 ルピーという破格の値段で売られ、広く流通していることが推測される。

¹⁶ *caritrahīn* は「*caritra* (立派な品行) を欠いた」すなわち「品性下劣な」といった意味である。K・シャーンディリヤは本書の題名を *Characterless* と訳

パーローと行った会話である。『バガヴァッド・ギーター』ではなくこうした小説を読むようになったのかというビルジューの問いかけに対してパーローは、「これは毒でギーターは甘露だって言うの？」(A: 71, B: 569)と答えた。『チャリトラヒーণ』は1917年にベンガル語で発表された小説で、20世紀初頭のベンガルを舞台に、寡婦となって婚家から追い出され、寮の食堂で女中として働くバラモン女性と雇い主との恋が扱われている。K・シャーンディリヤによれば、チャタルジーの小説は、「バドラロック」すなわち英領時代ベンガルに新しく生まれた男性エリートを中心とする社会で忌避される、寡婦、娼婦、下層階級の女性を扱うことで、その社会において女性が服従させられていることの原因を鋭く突こうとするものである。バドラロックたちにより大いに問題視されたが、他方で女性読者を獲得していった(Shandilya 2017: 39)。この『チャリトラヒーণ』は、パーローが『5人の乙女(パンチャカニヤー)』を手に行っているのを見た親戚の男性が渡したものと書かれている。5人の乙女とは『マハーバーラタ』のドラウパディーとクンティー、『ラーマヤナ』のアハルヤー、ターラー、マンドーダリーである。貞節な妻のモデルで、彼女らについて書かれた本をパーローが持っていたということだろう。パーローに本を贈った親戚の男性の意図は小説からは読み取れないが、『5人の乙女』と『チャリトラヒーণ』が対比されていることは明らかである。

『ギーター』や5人の乙女は、先に紹介したヒンドゥーの聖典類に記載される伝統的な価値観に属するもので、『チャリトラヒーণ』はそれに対する逸脱を描いた小説といえよう。この場面は、パーローが『ギーター』や5人の乙女ではなく『チャリトラヒーণ』に象徴される価値観を選び取っていること、他方でそれは非難されることだと知りつつも反発しているという意識があることを描いている。P・C・バットは、『パーロー』を通して「ミティラーにおける婚姻の誤った慣習について読者に注意を促すこと」が著者ナーガールジュンの目的であるとする。バットはミティラー地方の婚姻において、全ての男児の名前と家系、ゴートラなどを記録する帳簿の

している。

管理者と、ガタク (*ghatak*) と呼ばれる婚姻の仲介役が組んで悪事を働くことに言及する。彼らは適齢期をとうに過ぎた男性から金を受け取り少女との婚姻の手はずを整えるという (Bhatt 1974: 274)。パットは、その犠牲となったのがパーローであるとし、この見方に沿って物語を説明している。S・K・ヤーダヴもまた、『パーロー』は不均衡な婚姻を主題としており、仲介役男性の悪行とパーローの不運を、彼女の言葉を引用しながらまとめている (Yādav 2001: 37)。『パーロー』は、伝統的な価値観が維持されている社会の中で「犠牲になった」女性を扱った小説であるという見方がまず可能だが、伝統的価値観を受け入れないという選択を自ら行ったからこそ彼女は苦悩したと解釈できる。婚家で嫁としての仕事を文句も言わずこなし、夫の求めに応じて妊娠しながら、『チャリトラヒーシ』をお守りのように所有し、また母親に望まれ女性のヴラタを当然のように行いながら、その背後にあるスハーグの観念を受け入れているわけでは決してなく、自身の境遇を嘆きながら、二度と女性には生まれ変わりたい、夫から逃れたいとビルジュに訴え続け、腹の中にいる子すらも「鬼」だと言う彼女は、伝統的価値観との狭間でしがき苦しんだ少女なのであった。

ただし、ヒンドゥー教の聖典・法典が概してバラモン男性中心主義的であることは事実だが、サンスクリット語文献は家父長制的で、他方でヒンディー文学には、それらに描かれる古い価値観への対抗が見られるという単純な図式で捉えるのは誤りであろう。物語の序盤で、パーローの教育や賢さについて次のように書かれる。小学校の教師で、儀礼を執行する聖職者としての仕事もしていたパーローの父は、ミティラー地方出身と考えられている古代の女性学者たち¹⁷を誇りにし、パーローに良い教育を与え、

¹⁷ パーローの父が誇りにしている女性学者として言及されるのは、ガールギー、マイトレーイー、バーラティーである。ガールギーとマイトレーイーが登場する話で有名なのは『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』に収録されるもので、ガールギー・ヴァーチャクナヴィーは、ヴィデーハ国の王ジャンカが主催した討論会において、賢者ヤーージュニャヴァルキヤと激しい哲学議論を繰り広げた女性である (3.6.1, 3.8.1-12)。マイトレーイーはヤーージュニャヴァルキヤの妻で、「ブラフマンについて語ることでできる人」と言及されている (4.5.1)。またバーラティーは『パーロー』のこの箇所では、哲学者マ

将来は専門的な哲学議論まで理解するようになってほしいと願っていた。彼女は幼い頃にサンスクリット語の文法を理解し、『アマラコーシャ』や『ヒトーパーデーシャ』の一部を誦じ、「ゴーラクプルの『ラーマーヤナ』」¹⁸なども深く読めていた。父は娘のために立派な『ギター』を取り寄せていた（A: 17, B: 542）。パーローの父は、先述したような理想の女性像を学ばせたくて娘に『ギター』を与えたとは思えない。サンスクリットの教育を受けられる女性は稀であったという状況の中で、彼が与えたかった教育は、女性が自立して強く生きていくために必要な手段であったと考えられる。サーヴィトリには、知的で自立的な女性の側面と、夫への献身を貫く貞淑な女性の側面が調和的に備わっている。『女性の義務についての指南』は、この話から学ぶこととして「夫と義両親への奉仕」のみを述べており、現代の祭事の手引書でも後者の側面が強調されている。他方でこれらのもとになった『マハーバーラタ』のサーヴィトリの物語の原型を読むと、前者の側面が重要であることに気づく。教育・自立のためのものであった『ギター』が、彼女にとって反発する対象になったという転換は、ヒンドゥー教の聖典・法典そのものではなく手引書や人びとの意識のような後に付与された解釈の中で、サーヴィトリに見られる二側面のバランスが崩れたところに発生したといえるのではないだろうか。

おわりに

本稿は、インド独立前のミティラー地方の村を舞台としたヒンディー文学『パーロー』を、女性の置かれた境遇や苦悩に注目してまとめつつ、同書で言及された女性によるヴラタを通してヒンドゥー教の理想的な女性像と対比させることで、分析することを試みた。背景にあるヒンドゥー教の習慣や価値観をふまえることによって、パーローの境遇や感情をより詳細

ンダナ・ミシュラの妻として紹介されている（A: 17, B: 542）。

¹⁸ 「ゴーラクプルの」とはギター・プレス社が出版したという意味で、「ゴーラクプルの『ラーマーヤナ』」は、ヴァールミーキの『ラーマーヤナ』ではなく16世紀のヒンディー語の詩人トゥルスィーダースの著した『ラームチャリットマーナス』であると思われる。

に読み取ることができた。一方で、ヒンドゥー教の習慣や価値観を把握するのに、サンスクリット語の聖典そのものでなく、後になされた解釈が重要になることも指摘した。そのためには、実際のヒンドゥー教徒の営みの観察やインタビューも必要だが、人々の意識に影響を与えているギター・プレス社の書籍をはじめとする現代語の手引書類の分析は大変有効であろう。インドに無数にあるこうした文献は、研究対象としては軽視されがちであり、またサンスクリット語と現代語の両方の知識が必要になることもあってか、適切な分析も少ないように思われる。現代語の手引書類を積極的に取り入れたヒンドゥー教研究を今後も進めていきたいと考える。そして本稿は、聖典の伝統に連なる手引書類だけでなく、ヒンディー語文学も対象にした、筆者にとっては初めての試みである。聖典と文学の両面からのアプローチを取り入れた本稿が、ヒンドゥー教の聖典類あるいはヒンディー文学という片方からだけでは見えてこない世界を照射することを願う。

参考文献

- Bahan, Āśā va Lāḍo Bahan. n. d., *Bhāratīy Vrat-parv-tyauhār aur Mahilā Sangīt*, Haridvār: Raṇdhīr Prakāśan.
- Bhaṭṭ, Prakāścandra. 1974, *Nāgārjun: Jīvan aur Sāhitya*. Rāmpurā: Sevā Sadan Prakāśan.
- 1984, *Bhaviṣya-purāṇa*. Vol. II. Delhi: Nag Publishers.
- Goyandkā, Jaydayāl. Vikram Samvat 2071 (2014), *Striyōke liye Kartavyaśikṣā*. Gorakhpur: Gītā Press.
- 古賀勝朗・高橋明編. 2006, 『ヒンディー語＝日本語辞典』, 大修館書店.
- 上村勝彦訳. 2002, 『原典訳 マハーバーラタ 4』, ちくま学芸文庫.
- Menzies, R. A. 2014, “Symbols of Suhāg: Paradigms of Women’s Empowerment in Hindu Domestic Ritual Stories.” Vol. I. A thesis submitted in partial fulfillment of the requirements for the Doctor of Philosophy degree in Religious Studies in the Graduate Collage of The University of Iowa.

- Miśra, Śobhkānt. 1985, *Nāgārjun: Cuni Huī Racnā~e -I*. Dillī: Vāṇī Prakāśan.
- Miśra, Punīt. n. d., *Bārah Mahō ke Hinduō ke Pavitr Vrat aur Tyauhār*. Vārāṇasī: Ṭhākur Prasād Pustak Bhaṇḍār.
- Nāgārjun. 1975, *Pāro*. Hāpuḍ: Sambhāvnā Prakāśan.
- Nāgārjun. 1994, *Nāgārjun: Sampūrṇ Upanyās, bhāg-I*. Dillī: Yātrī Prakāśan.
- ナーガールジュン. 1981, 「バンヤン樹の陰」『印度民俗研究』, 第1号別巻, pp. 1–125.
- Parpola, A. 1998, “Sāvitṛī and Resurrection: The Ideal of Devoted Wife, Her Forehead Mark, Saṭī, and Human Sacrifice in Epic-Purāṇic, Vedic, Harappan-Dravidian and Near Eastern Perspectives.” In *Changing Patterns of Family and Kinship in South Asia*. Ed. by Asko Parpola and Sirpa Tenhunen. Helsinki: Finnish Oriental Society, pp. 167–312.
- Shandilya, Krupa. 2017, *Intimate Relations: Social Reform and the Late Nineteenth-Century South Asian Novel*. Evanston: Northwestern University Press.
- Śarmā, Hanumān. Vikram Samvat 2069 (2012), *Vrat-paricay*. Gorakhpur: Gītā Press.
- Singh, Hīrāmaṇi. n. d., *Bārahō Mahīne ke Sampūrṇ Hinduō ke Vrat Tyauhār*. Ilāhābād: Durgā Pustak Bhaṇḍār (Prā.) Li.
- 1987, *Skanda-purāṇa*. Vol. VII. Delhi: Nag Publishers.
- 渡瀬信之. 1990, 『マヌ法典—ヒンドゥー教世界の原型』, 中公新書.
- 渡瀬信之訳註. 2013, 『マヌ法典』, 東洋文庫.
- Yādav, Surendra Kumār. 2001, *Nāgārjun kā Upanyās Sāhitya Samsāmayik Sandarbh*. Dillī: Vāṇī Prakāśan.